

<学校活動部門>

長崎県宇久島神浦地区における伝統的な祭について



長崎県立宇久高等学校

3年 鈴木 遥萌

出崎 鈴蘭

1. はじめに

本論は、私たちの地元「宇久島」の複数の課題に目を向け、私たち高校生がそれらの改善のためにできることを模索したものである。

宇久島は、長崎県五島列島の最北端に位置する島である（図1）。畜産業や海産業が盛んで、最盛期には15,000人を超える島民が暮らしていた。しかし今は1,900人を切り、その大半が65歳以上という深刻な少子高齢化に直面している。

この人口減少と少子高齢化によって、島で行われていた伝統的な行事や祭の存続が厳しい状況になってきており、祭を小規模化したり、別の祭と吸収合併されてなくなったりしている現状がある。

そこで私たちは、3学年での総合的な探究の時間を利用して、以下の2つを目的とした活動を行うことにした。

- ① 宇久島独自の伝統・文化に関する記録を残すこと。
- ② 島外に向けて宇久島独自の伝統・文化の情報を、インターネットを利用して発信し、宇久島のPRを行うこと。

この発表をきっかけに、島外の方々が宇久島に興味を持ってくだされば幸いである。



図1. 宇久島の位置

2. 研究方法

まず、長崎県宇久島の神浦地区で行われている「竜神祭」と「しゃぐま棒引き」のふたつの祭について調べることにした。

事前活動として、2つの祭について、私たちが持っていた知識やインターネットを使って、祭の概要と疑問点をまとめた。以下、事前活動のまとめである。

① 竜神祭について

<祭の概要>

この祭は巖島神社で行われる夏祭であり、漁民の大漁と安全を祈願する伝統行事である（図2、図3）。旧暦の6月17日の夜、島内の巖島神社で神官を招いて神事が行われる。そして神浦地区付近を地域の人によってなされる行列が練り歩く。その後、月が昇るのを見計らい、幟や御神灯で飾った漁船に、港に集まった子供たちと御輿・笛・太鼓を乗せて「ひよーひよーひよー」と連呼しながら港内を3周することから、別名「ひよひよ祭」とも言われている。しかし、2019年からは新型コロナウイルスの影響によって開催が見送られている。

<疑問点>

- ・なぜ、「ひよーひよーひよー」と叫ぶのか。
- ・なぜ旧暦の6月17日に行われるのか。



図2. 船が港内をまわる様子

<https://matsurism.uminohi.jp/report/2020report5/>



図3. 船に神輿を載せている様子

<https://kokkyo-info.go.jp/5466/>

② しゃぐま棒引きについて

<祭の概要>

しゃぐま棒引きは、毎年秋に開催される宇久島神社の例大祭で行われるものである（図4、図5）。しゃぐまは、長い棒の先端にカツラのようなものがついており、行列の中で棒を横にしたり、投げたりする。棒引きは身長ほどの棒を引きずりながら、舞うようにして行列を歩く。時々掛け声をかけている。以前は、神浦地区に住んでいる、または親戚がいる中高生男子が行列に参加していたが、今では地区に関係なく祭に参加している。2019年から新型コロナウイルスの影響により開催されていない。

<祭の疑問点>

- ・どのような目的で、しゃぐま棒引きが行われているのか。
- ・要所で掛け声あるが、何とっていて、どのような意味なのか。



図4. しゃぐま棒引きの様子
(宇久町郷土史より)

[http://blog.livedoor.jp/huukei44/
archives/51453117.html](http://blog.livedoor.jp/huukei44/archives/51453117.html)



図5. しゃぐま棒引きの様子

<https://kokkyo-info.go.jp/5868/>

宇久神楽保存会の会長であり、宇久島神社の神主として竜神祭・しゃぐま棒引きを催している月川徹氏に取材をし、詳しい内容を尋ねることにした（図6、7）。5月19日木曜日に月川徹氏のご自宅に訪問し、お話を伺ったり、資料を見せてもらったりした。



図6．月川徹氏



図7．取材の様子

3. 研究結果

① 竜神祭について

<祭の紹介>

前述したように竜神祭は宇久町神浦にある巖島神社で旧暦の6月17日に行われる祭である。広島県の宮島の巖島神社の神様と同じ神様を祀り、管絃祭とよく似ている。昔は漁民たちの海上安全と大漁を祈るために行われる。漁師のための祭だったが、参加する人が少なくなってきたため、現在は秋祭と融合している。

この祭の一番の見どころは乗船した人だけが間近で見ることができる催しだ。船は出港すると港内を3周回る。その際にお供え物を沈める瞬間がある。その瞬間は船に乗った人だけが見ることができる。また、船を止め、祝詞を上げる瞬間がある。この場面もぜひ見てみてほしい。船は数隻出港し、神事に使う道具や神職が載っていない船もあり、その船であれば大人も子供も船に乗ることができる。機会があれば乗ってみるのもいいかもれない。その船でしか見られない瞬間、景色が多くある。

<疑問点について>

- ・なぜ、「ひよーひよーひよー」と叫ぶのか。

「ひよーひよーひよー」という掛け声には説が二つある。一つ目は宇久島に伝わる「笛の名人龍宮に召される」という昔話で登場する、竜神に連れていかれてしまった庄屋様が弾いていた笛の音を再現したものである。二つ目は不知火の火を知らせるために誰かが叫んだ「火よー火よー火よー」というものであるという説だ。これはいまだにどちらの説が正しいのかははっきりしないという。

- ・なぜ旧暦の6月17日に行われるのか。

この祭は潮の満ち引きと関わるため、日時をずらすことができないのが特徴であり、たいてい7月20日から30日の大潮の満月の日の干潮の時に行われる。これは、宇久島に伝わる「笛の名人龍宮に召される」という昔話で登場する「庄屋様」が、この時期の大潮の満月の日の干潮の時に現れるとされているからである。

残念ながら、2019年からは新型コロナウイルスの影響によって開催されていない。

② しゃぐま棒引きについて

<祭の紹介>

毎年10月24日・25日に近い土曜、日曜日に行われる祭である。かつては24日、25日に行われていたが、近年は人手不足が原因で、大人や子どもが集まりやすい週末に行われている。いつ始まったかはわからないが、棒引きの棒に天保3年(西暦1832年)と刻まれてあることから、この頃にはすでに行われていたのではないかとされている。この例大祭では、神社での祭典の後、参列者は神前に供えられた生のヒジキを柳箸でいただく。その後、行列が始まる。行列は、塩振り・社名旗・棒引き・しゃぐまが続く。「棒引き」は、黒羽織に黒パッチ、わらじ姿で行列し、棒を引きながら低い姿勢で、大きく一歩ずつ進む。「しゃぐま」は、毛槍を指し、黒羽織に白パッチ、わらじ姿で行列し、進行中に大名行列の所作で毛槍を投げ渡す。しゃぐまと棒引きの役割は、神輿三体の行列を先導することである。

しゃぐまの先端にある毛が使用するたびに減ってきてしまい、数年前に新しいものに作り直した。古く使われていたしゃぐまは、宇久島の資料館に保存されている。また、上記にあるように人手不足のために日時が変更

されたり、下記にあるように掛け声をかける場所を限定したりと、細かな部分に変更されながら、現在のしゃぐま棒引きに至る。

この祭で行われるしゃぐまは、長く、しなるのが見どころである。宇久島の近くでは、平戸の亀岡神社がしゃぐまをしているそうだが、長さが短く、しならないそうなので、ぜひ注目してほしい。そして、そのしゃぐまの投げ渡しなどが披露される場所は、ついでたけと呼ばれる場所の裏や、酒を奉納していた館の前、御旅所など、何か所かある。地域の方々しかわからない場所なので、後ろをつけて行ってみるといいかもしれない。

<疑問点について>

- ・どのような目的で、しゃぐま棒引きが行われているのか。

行われる時期が毎年10月24日・25日に近い土曜、日曜日に行われる理由は、天満宮にまつられる菅原道真公が「25」という数字を好んだとされており、縁起がよい日だからということがわかったものの、祭が始まった理由や年代については資料がなく、わからなかった。

- ・要所で掛け声あるが、何と言っていて、どのような意味なのか。

お宮を出るときや、御旅所に着いたときなど、要所でその場所にあった掛け声がされる。例えば、行列が宇久島神社を出るときには、「下におれ、下におれ、宇久島神社のお乗り出しでござる」というような神社を出ることを知らせる内容の掛け声をかける。御旅所に着いた時には、「御旅所にお泊り、お休みでござる」といったような、御旅所で泊まることを知らせる内容の掛け声をかける。ただ、現在は行列に参加する人々の負担を減らすため、掛け声をかける場所を限定している。

4. 考察

今後、人口が減少し、祭の存続が難しくなるかもしれない。しかし、それが原因で祭を開催できなくなったとしても、後世に伝えていくべき伝統行事だと考える。実物を残せなかったとしても写真や映像として残し、いかにたくさんの人の記憶に残すことができるのかが重要だと思う。現在はどちらの祭も新型コロナウイルス感染症の影響で実施できていないが、実施されるようになった場合、私たち高校生がこの2つの祭の記録を残していけないか、方法を考えていきたいと考えた。

5. まとめと今後の研究

今回の研究結果から、宇久島の伝統的な祭の厳しい現状を知ることができた。島民でも初めて知ることばかりで、興味深い研究になった。今後は、残っている資料と関係者の皆さんの記憶から、過去に行われていた祭の形を明らかにすることが出来れば、現在の祭と比較をし、何が原因で変化していったのかを推測することが出来るのではないかと考える。

今回の調査で知ったことについて、インターネットを使ったPRに活かし、宇久島の活性化に貢献したい。

6. 謝辞

本研究は月川徹氏のご協力をうけて行いました。ここに記して感謝いたします。